RENEWED GEIGEKI TOUR!

遂に完成!設計者と巡る『芸劇』探検ツアー

約1年半にわたる大規模改修を経て、新しく生まれ変わった東京芸術劇場。
よりよい環境で、より安心して舞台芸術を楽しめるよう、
建物本体から設備、装飾デザインに至るまで、とことんこだわり抜いて改修された。
野田芸術監督が目指すのは、国境を越え、全ての人にオープンな「出逢いと交流の場」。
たくさんの人の想いと叡智が詰まったその場所は、果たしてどんな姿で私たちを迎えてくれるのか。
オープン目前の劇場に潜入し、大変身を遂げた東京芸術劇場を徹底解剖!

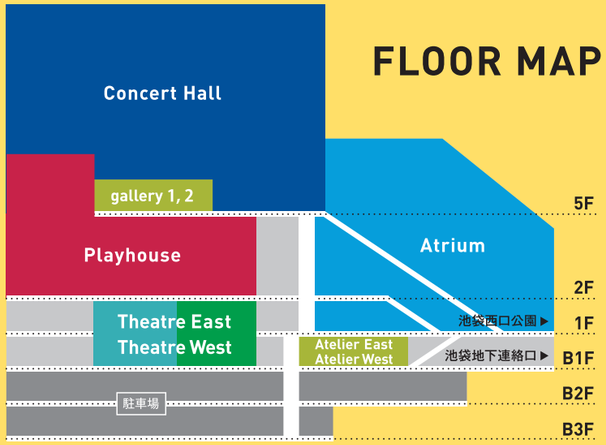
5F 最良の音響を生み出すホール

Concert Hall
— コンサートホール —

客席数／1,999席

本格的な音楽専門ホール。オープンステージで、120名編成のオーケストラと200名の合唱団が同時に演奏できる広さ。舞台正面に備えつけられた、3つの時代の音楽を弾き分けることができるパイプオルガンを見せたまま演奏会ができます。

FLOOR MAP



B1F フラットで自由度の高い小劇場

Theatre East
— シアターイースト —

客席数324席(最大)

東立組床で、エンドステージ、スラストステージ、センターステージなど自在なステージ構成ができるホール。ブラックボックスに近いニュートラルな空間は多様な演出に応えます。

2F 新しい文化の創造・発信の拠点

Playhouse
— プレイハウス —

客席数／834席

舞台機構、雰囲気ともに一新された、演劇、舞踊等に好適な劇場。客席を囲むレンガの壁が良質な音響と空間演出の2つの効果を発揮。見やすさも向上し、舞台と客席の親密感が高まりました。前舞台やオーケストラピットになる迫りも備えています。

Others
— その他施設 —

リハーサルルーム
シンフォニースペース
ミーティングルーム

オーケストラ、室内楽、合唱、舞踊、ダンス、演劇等の練習に適したリハーサルルーム。オーケストラ、室内楽の練習他、会議でも使用可能なシンフォニースペース。会議、研修、講演会等に適したミーティングルーム。目的に合わせ、様々な用途でご利用頂けます。

私たちが案内します!!

山本雅人 Masato Yamamoto
松田平田設計、第二建築設計部主任。全体のまとめと意匠設計、材料・色・形などを決めている。全体の設計から監理まで担当。

長谷川祥久 Satio Hasegawa
香山壽夫建築研究所、設計主任。主にアトリウムやプレイハウス、シアターイースト、シアターウエストの内装、ホール機能の担当。

Atrium
— アトリウム —

劇場入口の広い空間は様々なショップや飲食店が並ぶ憩いの空間。
同時に多様な催しが行われるイベント広場でもあります。

Atelier・Gallery
— アトリエ・ギャラリー —

絵画、写真、書などの美術作品や様々な創造活動のための展示スペース。ギャラリー2としてスペースがひとつ増設され、発信のチャンスが広がりました。

B1F 汎用性の高い固定舞台

Theatre West
— シアターウエスト —

客席数257席(最大)

間口9m、奥行き5.2m。舞台は汎用性の高い固定式に。可動式の袖パネルがあり、迫り機構を使ってスラストステージや脇さじきも作ることができ、幅広い演出が可能に。

Concert Hall

— コンサートホール —

上質な音に包まれる、
快適で心地よい空間へ

1,999席を擁する、東京芸術劇場最大のホール。
音の響きから劇場の雰囲気まで、
演奏者にも観客にも心地よい空間を目指して生まれ変わった。
上質な音に包まれる、贅沢なひとときを――。

ホールに一歩足を踏み入れた瞬間、その美しく凛とした姿に思わず息をのむ。ステージと客席は一体感を増し、光沢の抑えられた壁が、温かな光とともに優しく空間を包み込む。

今回の改修で最も力を入れたのは、「豊かな響き」と「快適な演奏・鑑賞環境」。最高の音楽を楽しむためのコンサートホールで大切なのは、何と言っても「音」のクオリティ。芸劇ならではのどっしりとした響きはそのままに、より良質な音を目指しさらなる改善が加えられた。平坦な壁にリブを入れることで拡散面を形成し、ステージからの音が揺らぎながら柔らかい音になって客席に返ってくる。さらに、ステージに聳え立つパイプオルガンへの視界を遮ることなく、よりよい響きが得られるよう最良の天井反射板形状を追求した。

また、大人数を擁する演目用に客席の最前列を取り払い、その分ステージが拡張された。演奏者にとってのメリットはもちろん、このたった1列分の違いが大きな臨場感を生み出すというから、これは観客にとっても嬉しい限り。

そしてもう一つ、長時間の演奏を楽しむために大切な椅子。クッション部分はもちろん、肘掛けもナチュラルな木調に取り替えられている。暖色系の赤ベースで統一された客席は落ち着きを増し、よりリラックスした環境で演奏が楽しめそう。

今回の改修では、演奏者や観客の声も多いに取り入れられているという。例えばステージからの眺め。客席奥からステージに向かって三角状に突き出ていた部分は、圧迫感があるという演奏者からの声を反映し、綺麗に削り取られた。客席奥の壁も無機質なステンレスから木の素材に替えられ、劇場全体に一体感と温かさが生まれ、より心地よい演奏空間へと生まれ変わった。

また、冷たい印象を与えていた石の大壁面は、石の光沢を抑えるとともに木リブが加えられ、温かみのある落ち着いた雰囲気に印象を変えている。

ステージから、客席から、それぞれの目線でよりよい空間へと変貌を遂げたコンサートホール。劇場の代名詞でもあるパイプオルガンは、大規模な分解と点検、清掃が引き続き行われているため、来年3月にお披露目予定。一台で異なる時代の音楽を弾き分ける、世界で唯一のパイプオルガンの音色を心待ちにしながら、より快適で上質な空間へと生まれ変わったこの場所で、一足先に贅沢な音に酔いしれたい。

この棒状のリブがポイント！つるっとした壁面では鋭い音の反射になるところ、リブを入れることにより客席に跳ね返る音が柔らかくなる。音の違いをぜひ感じてみて。

突き出していたコンクリートの鋭角部分がなくなり、ステージから客席を見た時の圧迫感はすっかり解消。客席との一体感を感じながらの演奏に、いい音が生まれる予感！

3階席に朗報！これまでは階段を利用するしかなかったのが、今回のリニューアルで利便性がぐんとアップ。ホールのエントランスから2階、3階席へのエレベーターが新設された。

Playhouse

— プレイハウス —

客席と舞台がひとつになる、
より親密性の高い劇場へ

「席はどこからも見やすく。多様なニーズに対応するバラエティに富んだ劇場に」
野田芸術監督の想いが詰まったプレイハウスは、機能も自由度も格段にアップ
枠にとらわれることのない「創造発信型劇場」に
相応しい空間が誕生した。

入口からロビー、客席、ステージに至るまで、全く新しい顔に生まれ変わった中ホール。新設されたモダンな門をくぐると、落ち着いた茶系のトーンで統一された心地よいロビー空間が待っている。年月を経て人の痕跡がしみ込んだ石畳を思わせるカーペットは、ここが「人が集う場」であることを演出しているよう。

期待を胸に劇場に足を踏み入れると、そのあまりの変貌ぶりに驚く。人が集まった時にいかに熱気を、エネルギーを高められるかを考え辿り着いた答えは、「人で囲む」。そのイメージをもとに、舞台を囲むように配置された客席は、正面、サイド、立ち見用のスペースまで設けられ、バラエティ豊かな席で観客を迎え入れる。

サイドバルコニーは、客席としての他、照明基地や舞台としても使用でき、また、左右の壁に設置されたキャットウォークも、照明、演出スペースとしての他、舞台としても使えるようになっている。完成後の劇場を見た野田芸術監督もこれには大満足。自由度の高い舞台設計により、創り手の想像力をも刺激する空間になったようだ。

機能面での様々な改善に加え、劇場の印象もこれまでとは一新されている。むき出しのコンクリート壁とレンガがその印象を大きく変えているのだが、これは装飾ではなく、音響効果に大きな役割を果たしているという。レンガをすべて積み上げるのではなく不規則な形に積むことで、客席サイドの壁は音を拡散させ、隙間をあけて積むことで客席奥の壁は音を吸収する仕組みに。また、フロントサイドの壁の形状を変えることにより、音の回り（ステージからの音が円形の客席を回ってステージに戻ること）が大幅に改善された。これにより音響効果が向上し、演じ手にとっても観客にとってもよりよい舞台環境となった。

今回の改修で一役買ったレンガ壁は、職人一人ひとりの手作業により仕上げられたもの。不要なものを剥ぎ取って、裸の状態から必要なものだけを足していく。改修だからこそできるこのデザイン、レンガの下に覗く元の壁が何ともいい雰囲気を醸し出している。思わず触れたくなるような質感と、ここが自由な表現の場であることを象徴するかのような、型にとらわれないデザイン。数々の劇場を見てきたが、空の劇場にこんなにワクワクしたのは久しぶりだ。リニューアルオープン後は早速注目のラインナップが目白押し。生まれ変わった劇場でどんな体験が待っているのか、期待せずにはいられない！

音響効果の改善と劇場のイメージ作り、歴史を感じさせるレンガが2つの役割を果たしている。コンクリート壁と、ところどころ抜けていたり隙間があいている無造作に見えるレンガの積み方も、音の拡散や吸収を緻密に計算してのもの！

客席は一列ごとに座高が変えられ、どの席からも観やすいよう目線の位置が調整されている。1階席と2階席の高低差を減らし、左右ブロックの客席を一段上げたサイド席は空間に一体感を作った。

機能性と自由度を追究した2つの空間

左にシアターイースト、右にシアターウエスト。隣同士に並ぶ2つの劇場では、それぞれの特徴を活かした改修が行われた。

フラットな空間が印象的なシアターイースト。「黒い箱で色々なことができるびっくり箱」という元々のコンセプトに忠実に、シンプルで使いやすい形に見直された。深さ2mの奈落に、自由に組み立てられる床システムを入れ、さらにその上に組立客席床をのせたことで、舞台や客席のレベルも自由に動かせるように。作品ごとに表情を変える空間に、劇場を訪れる楽しみも増えそうだ。

設計者の長谷川さんが開発した座り心地抜群の椅子。快適な舞台鑑賞に一役買うこと間違いなし!

シアターウエストでは、舞台の奥行きを広げた他、天井部分に演出用のスペース(キャットウォーク)が増設され、より幅広い作品に対応できるよう舞台設備が整えられた。こちらにも組立客席床を導入し、客席レイアウトにもバリエーションを生み出した。

劇場前のロワー広場では、誰でも無料で楽しめるイベントが行われる予定。若い世代の表現者にとっては新たな表現の場に、劇場に足を踏み入れたことのない人たちにとっては、気軽に舞台芸術に触れることができる出逢いの場となりそうだ。

4つの劇場を臨む、開放感溢れる玄関口

一歩足を踏み入れた瞬間から始まる特別な時間。劇場の第一印象を担う玄関口は、東京芸術劇場を象徴する魅力的な空間へと生まれ変わった。

1つ目のポイントは劇場の「顔」。4つの劇場が縦に積み重なっている建物全体の特徴を活かし、コンサートホール、プレイハウス、シアターイースト、シアターウエスト、4つ全てのエントランスが一望できるよう改修された。初めて訪れる人にも分かりやすく、アトリウムから劇場までの道のりにも期待が高まりそう。

2つ目は、ひと際存在感を放っていたエスカレーター。5階のコンサートホールまで一直線でつながっていたエスカレーターを乗り継ぎ式にし、吹き抜けの大空間を有効活用できるよう壁側に移動。安全性の向上を図るとともに圧迫感を軽減した。他にもこの場所でのイベント開催を想定した設備が整えられ、劇場の入口としてのみならず、全ての人にオープンな表現の場としての準備も万全に!まさに出逢いと交流の場に相応しい場所になりそうだ。

全面ガラス張りの壁には、目隠しを兼ねた美しい装飾が。こだわりのデザインと木の素材感が、心地よい空間を演出している。

今回新設されたボックスオフィス。チケットの購入ができる他、総合案内カウンターとしての役割も担っている。

人が集い、何かが生まれる「創造発信型劇場」へ

YAMAMOTO × HASEGAWA

山本雅人×長谷川祥久 設計者対談

——まず今回の改修の経緯を教えてください。

山本:2008年の夏に設計者の選定が行われ、翌年改修内容を決める基本設計がスタートしました。私たちの他に、音響、舞台設備関係、構造設計、照明デザインの専門家が集まり、チームを組み、東京都や劇場の意向を汲み取りながら進めていきました。昨年4月から実際に工事を行い、遂に完成を迎えました。

長谷川:今回の改修は、単に必要に迫られただけでなく、東京芸術劇場の「一歩前へ」という意思に基づいて、目指す劇場に生まれ変わるためのものだと思うんです。これまでは貸し劇場として機能してきたけれど、これからは自分たちも自主的に物を創り、文化を発信していく。そのために今まで何が足りなかったのか、どう変わるべきかを考え抜いた結果です。

「物を創り、文化を発信していく」

——改修にあたって、芸術監督・野田さんからのリクエストは?

長谷川:まず最初におっしゃったのが、見えにくい席がないようにしたいということ。そして、よく見えることはとても大事だけど、色んな席があっていい。正面を向いた席だけでなく、脇から見ている席があったり立ち見席があったり、色んな形で人が見ているっていうのは楽しいよねっていう、つまりバラエティがある客席にしたいと。

山本:色々な人に観に来てほしいってことでしょうね。

長谷川:それから、野田さんが舞台上で感じていた音の違和感の改善。この3つがリクエストでした。

——劇場を設計する上で、大切なことは何でしょうか。

山本:観に来る人と演じる人、両方の視点を大切にしながら設計します。観客の視点で考えた時には、いつもとは違う特別な環境に足を踏み入れるわけですから、日常との境界線を作り、雰囲気を変えてあげることが大事だと思います。逆に、演じる人たちにとっては、全てをこちらで用意するのがいいとは限らない。一般的な建物の場合は設計者側から提案することが多いのですが、劇場の場合、特に今回のような改修では、こう使っていきたい、こんなことをやっていきたいという使い手の意向を受け入れて、アレンジして作っていくというやり方ですね。

長谷川:人はなぜ劇場に来るのか。例えばいい音楽を聴きたいなら家の中でも聴けるし、お金があれば自宅に役者を招くこともできるかもしれない。だけど、そこで得られる感動と劇場で体験するものは全く違うんだと思います。人が集まるということが喜びに変わる空間を作るにはどうしたらいいか、それを考えます。

「劇場でしか体験出来ない感動がある」

大道芸でも何もない広いところでやる場合、人はなぜか円陣を組みます。囲むことでエネルギーが集まり、空間ができ上がっていく。それを建築でサポートすることができれば、そこに劇場を設計する意味があるのかなと思います。

——今回の改修のこだわりやポイントは?

長谷川:改修というのは、元々ある建物のよさを活かすということです。例えば、この劇場はそれぞれのホールが縦に積み上げられ、シンメトリーに並んでいる。劇場の中心線を共有して、整然と積み上げられたトーテムポールのような構成に、アトリウムという顔がついているのが面白いところです。アトリウムに立った時に、各階の劇場の顔が見えるようにすることで、この建物の特徴を表現しました。

それから、お客さんが長い時間いられる空間になればいいなと思っています。ロビーでもホールでも、どの場所にいても今までよりそこに長く留まっていられること。人が集まるということも含めて、人間が何を快適と感じるか、居心地のよさというのは意識しましたね。

——その仕掛けはどのあたりにあるのでしょうか。

長谷川:自然界に存在しない色はあまり使わず、ナチュラルな素材感で作ったりとか。

山本:以前のアトリウムは、白やブルー、グリーンなどを基調としていて、劇場に隣接する池袋西口公園との一体感がありました。今回はそれを切り離し、劇場という日常とは違う空間を感じることで、来た人がゆっくりそこにいられるようにしたいなと。都市の中にありながら落ち着きとまとまりのある空間を思い描き、土や木のような、温もりのある自然の色や素材を選んでいったんです。改修ということで色々と制約もありましたが、元の建物がある中で今までとは違う世界を作り上げていって、まさに「変身」させられればいいですね。

「今までとは違う世界に「変身」させる」

——改修を終えてみていかがですか?

山本:手を加えることによって、もちろんよりよくなったと信じています。ただ、いざオープンして使われた時に、どういう反応がかえってくるのかというのは実はドキドキしています。チケットを買って観に来てくださるお客さんや、そこで演じる役者さんや演奏する方たちが何と言うか。今は「ハコはできました。あとは使ってみてどうか」っていうところですね。

長谷川:これまで東京芸術劇場に何度も来ていた人が、「あ、ここってこんな空間だったんだ。こんなにいい場所だったんだ」と思ってくれたらいいなと。「変わったね」というよりは、元々あった空間のよさを再発見してくれたら嬉しいです。